

37年間の輝かしい歴史を持つ アメリカ語学研修旅行「フロリダプログラム」終了

37年前、当時、金城学院高等学校で教育宣教師として英語を教えられていた、フロリダ州セントピーターズバーグ市にあるエカード大学の故リチャード・ブレデンバーグ教授は、生徒に“生きた英語”と“英語の世界に架ける夢”を与えたいと願い、中・高の校長であった故 近藤武一先生や森岡廣實先生らと話し合った結果、「Kondoh Bredenberg Plan」として、フロリダ語学研修プログラムを発足させました。

以後、金城学院の教育目標のひとつである「国際理解の教育」に基づき、37年間で約1,870名の生徒が参加し、異文化の交流や国際理解等の貴重な機会を与えられてきましたが、この伝統的な「フロリダプログラム」も、今年、アメリカ語学研修のさらなる発展を願いながら終了することとなりました。

今年実施された第37回語学研修旅行の終了後、柏木学院長がセントピーターズバーグを訪れ、ブレデンバーグ夫人に金城学院の歴史に残るこのプログラムの終了を直接報告、夫妻とそのご家族の多大な貢献に対して深い感謝の意を伝え、感謝状を贈呈しました。

それに対し夫人からは、記念のクリスタルと柏木学院長宛ての感謝の手紙が贈られました。いずれの品からも、夫人のフロリダプログラムに対する熱い思いをうかがうことができます。

あらためて、ブレデンバーグご夫妻、ご家族の皆様、そしてこのプログラムにご協力・ご支援をいただきましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

手紙の日本語訳

金城学院学院長 柏木哲夫 殿
親愛なる柏木学院長

このたびは、37年間にわたる「金城学院・エカード大学プログラム」を祝福するために、フロリダに足を運ばれ、わがファミリーに対して敬意を表していただいたことにより感謝いたします。

故“ディック”ブレデンバーグと森岡廣實先生の語らいの中から構想が生まれたこのプログラムは、いままでに、1,000人を超える人々が参加し、金城学院の生徒と、エカード大学の教師、アメリカのホストたちとの橋渡し役を務めてきました。

70年代にこのプログラムが開始されたのち、金城学院の生徒たちは異なる言語や文化に触れたことで、自分の世界を大きく広げることができました。また、今後ますます統合されていくであろう世界の中で、どのように考え、コミュニケーションを取り、振る舞うかを学ぶ機会にも恵まれたのです。

一方、このプログラムは、エカード大学のTESOL(※)を専攻する学生にも、貴重な英語教授技術の修練の機会を提供しました。ここで学んだ学生の多くが、その後、金城学院、ならびに日本の他の学校等で教鞭を振るっています。

金城学院の生徒たちは、アメリカのホストファミリーにうまく溶け込んできました。その関係の多くは、研修から数十年が経っても途絶えることがなく、アメリカからかつての生徒を訪ねることもあれば、大人になった日本の生徒たちがホストファミリーの元を再び訪れたりもしているのです。

わがブレデンバーグ家は、金城学院とエカード大学が残したこの功績を誇りに思っています。

長い年月によって培われてきた両校の関係は、プログラムが終焉を迎えた後も、続いていくものと信じて疑いません。勉強、親交、そして永遠に心に刻まれるであろう素晴らしい数々の経験を通して、われわれはともに高め合うことができたのですから。

深い感謝と尊敬を込めて

フルダ・ブレデンバーグ
イングリッド・ブレデンバーグ
エリック・ブレデンバーグ
シグリッド・フロー
他、わがファミリーより

※ TESOL = 英語を母国語としない人への英語教授法



贈呈されたクリスタル記念品

ECKERD COLLEGE
SPECIAL PROGRAMS
August 28, 2007

Dr. Tetsuo Kashiwagi
President
Kinjo Gakuin
Nagoya, Japan

Dear Dr. Kashiwagi,

Thank you for honoring our family by coming to Florida to celebrate 37 years of the Kinjo-Eckerd Program. Coceived over cups of coffee and a conversation between Dick Bredenberg and Hiromi Morioka, the program has touched thousands of people and built bridges of understanding between Kinjo students and their Eckerd teachers and American hosts.

When the program was launched in the 1970's, it expanded the Kinjo students world by introducing them to a culture and language quite different from their own. It provided experiences and classes designed to help the students think, communicate and behave in ways that prepared them for a world that has become increasingly integrated and interdependent.

The program also provided opportunities for Eckerd TESOL students to practice their teaching skills in a collaborative and supervised fashion. Many of those Eckerd students went on to successful teaching careers at Kinjo and elsewhere in Japan.

For 37 years, Kinjo students have charmed their way into the hearts and homes of American host families. Some of the relationships formed between the students and their hosts have endured for decades, with the Americans visiting "their" students in Japan or hosting them on return trips to the States as adults.

The Bredenberg family is proud to have been part of the Kinjo-Eckerd legacy. We believe that the connection between the two schools will endure beyond the program, through the relationships formed through the years. The program has enriched each of us through the lessons learned, relationships forged, and the beautiful experiences that will leave lasting imprints on our hearts.

With deep gratitude and respect,

Huldah Bredenberg.
Ingrid Bredenberg.
Eric Bredenberg.
Sigrid Flor...and our families

ブレデンバーグ夫人から柏木学院長に宛てられた手紙

夏の貴重な体験!



イングリッシュ・サマーキャンプ開催

中学・高校では、国際理解教育の実践として、アメリカ、オーストラリアでの語学研修旅行を運営しています。今年の夏休み、

これら既存のプログラムに加え、国内で実施する「English Summer Camp (イングリッシュ・サマーキャンプ)」が新たに始まりました。中学1年生から高校3年生までを対象とする、パスポートのいらぬ気軽に参加できる語学研修です。

今年は、中学生21名、高校生4名が参加し、8月23日(木)から25日(土)の3日間、長野県木曽福島にあるペンションで実施しました。

ペンションに到着すると、アメリカ人大学生ら8名のスタッフが笑顔で金城生を迎えてくれました。彼らの笑顔はキャンプの間中、絶えることがありませんでした。

オリエンテーションでは、1) Smile (笑顔)、2) Speak English (英語で話す)、3) It's OK to make mistakes (間

違いを恐れない) の3つのルールが提示され、アクティビティが始まりました。

1分間でいかに多くのフレーズを覚えられるかを競う“One minute talk”、自分について語る“My story”、グループで作成する“Skit (寸劇)”などの活動に参加者全員、積極的に取り組みました。とりわけ、とても緊張した様子で、“My story”を一生懸命に発表する中学1年生の姿が印象的でした。

一方、こうした活動の合間には、バランス良く、さまざまなゲームが織り交ぜられており、中学生も高校生も大変リラックスした雰囲気の中で、遊びを通じて自然に英語を学ぶことができました。アメリカンキャンプならではのキャンプファイヤーでの“マッシュマロ焼き”も、楽しい思い出のひとつとなりました。キャンプの参加者は、自然体で英語を聞き、書き、話すことができ英語学習への意欲も高まったことでしょう。

そして、英語の学習に加えてこのキャンプがもたらしたのは、普段、別々のキャンパスで生活する中学生と高校生の触れ合いの機会でした。中学生と高校生が、ともに「いつも笑顔で、間違いを恐れずに行動する」ことの大切さを学びました。

高等学校

第50回 校内英語スピーチコンテスト開催

9月20日、例年と同様に「しらゆり祭」の初日、校内英語スピーチコンテストの本選が開催されました。

先立って行われた4月の予選には、24名の生徒が出場し、課題英文の暗唱朗読などに取り組みましたが、その中から6名の生徒が選ばれて、この本選へと進出しました。

「部活動で得られた体験」といった身近な題材から、「環境問題」「赤ちゃんポストの問題」といった時事的な社会問題を題材にしたものまで、幅広いジャンルのスピーチを出場者は披露してくれました。

予選出場の前から出場者は題材選びを始め、日本語での作文、英語原稿への翻訳、そして暗唱練習へと、約半年間にわたって自分のスピーチをコツコツと着実に仕上げてきました。

それぞれが選んだテーマに対して鋭く観察し、客観的なデータ等を織り交ぜてきちんと分析したうえで、自分の意見、主張を展開するという、しっかりとした文章構成の下に原稿を作成しました。

さらに、抑揚(イントネーション)や視線の向け方(アイ・コンタクト)、身振り・手振り(ジェスチャー)といった、スピーチの際の効果的な技巧を繰り返しの練習で身につけて本

選に臨みました。

いずれも完成度の高い、優劣のつけがたいスピーチばかりでしたが、内容、発音、発表態度等から成る審査項目を総合的に判断して、上位3名のスピーチには賞が授与されました。



主任審査員としてお招きした文学部英語英米文化学科の楚輪教授から、お褒めの言葉、スピーチの際のアドバイス等の講評をいただき、結果発表とともにコンテストは終了しました。

回数を重ねて、スピーチコンテストは今回で50回目を迎えました。スピーチの題材として扱われる内容は、年ごとの世相、価値観の変化を反映しています。しかし、出場者のスピーチに懸ける思い、極めたいという姿勢は、先達から脈々と受け継がれてきたものであり、恒久に不変のものである、そんな思いをいっそう強くさせられる、節目のコンテストでした。

「ピースあいち」で平和活動発表展示

一昨年と昨年の中学3年生（現高校1、2年生）による、『祖父母に聞いた戦争体験「15歳の語り継ぐ戦争」展』が、「戦争と平和の資料館 ピースあいち」で開催されました。

これは、おじいちゃん、おばあちゃんに取材した45人の生徒による「私の聞いた戦争」と、クラスごとに「平和新聞」を編集した冊子「私の聞いた戦争 見た広島」18冊が、7月3日から9月1日までの約2か月間、展示されたものです。

ピースあいちは、関係者の方々の努力によって、今年5月4日、名東区よもぎ台に開館した愛知の戦争資料館で、本校生徒による「15歳の語り継ぐ戦争」展は、ピースあいち初め



ての中高生の作品展となりました。

中学3年生は、毎年、修学旅行で広島を訪れ、市内各所で自由研修を行い、被爆者の方にお話をうかがっています。旅行後、見学した広島と、身近なおじいちゃん、おばあちゃんへの戦争体験の取材から、一人ひとりが「平和新聞」を作り、クラスごとの冊子「私の聞いた戦争 見た広島」をまとめています。



おじいちゃん、おばあちゃんに体験を聞くことで、戦争が遠い昔の歴史上の出来事ではなく、自分の身近なものとして迫ってきます。おじいちゃんが学徒動員先の軍需工場で空襲に遭い友だちを失ったこと…、矢田、鶴舞、大江、白鳥橋…、聞きなれた地名が証言の中に出てきます。優しい肉親が、いつもと違う険しい顔で話してくれる体験が、生徒の胸に深く刻まれます。広島で見学したことも、そうして実感となっていくのです。

最後に、この場をお借りして、体験を話して下さったご家族のみなさんに、お礼を申し上げます。貴重なご証言は、「15歳の語り継ぐ戦争」を集めた冊子として、永く金城学院の平和学習に生かしてまいります。

最後に、この場をお借りして、体験を話して下さったご家族のみなさんに、お礼を申し上げます。貴重なご証言は、「15歳の語り継ぐ戦争」を集めた冊子として、永く金城学院の平和学習に生かしてまいります。



トイレ・リフレッシュ工事完了!

スリーエー
3A ～明るく・温かく・愛される～をめざして、昨年より計画を進めてきたトイレ・リフレッシュ工事が、今年の夏休みに完了いたしました。

全校でアンケートを実施し、アイデアや意見を取り入れた「生徒参加型」のトイレ! 恵愛館1階は青、2階はオレンジ、3階は赤、そして信愛館は緑をイメージカラーとし、内壁のフリーデザインスペースには、生徒から公募した全36作品のデザイン原画の中から、投票で「神秘」「平和」「夢の中の海」が選ばれ、タイル壁画になりました。



便座は、和洋式（各5台）と車いす対応のウォシュレット付バリアフリートイレ（1台）とし、手洗い場は蛇口の自動化やハンドソープをつけることによって、ウイルス感染等か

ら身を守る衛生的なものに、さらに友だちと楽しくコミュニケーションを図れるよう、“対面式”洗面台にしました。

新しくなったトイレは、生徒たちから「きれいで使いやすい」と、とても好評です。

自分たちの手で作った、自分たちのトイレであることに誇りと責任を持って使っていけるよう、厚生常任委員会では、9月の恵愛祭での「ハンカチ携帯キャンペーン」を皮切りに、11月10日（いいトイレの日）にちなんで、日本トイレ協会の遠藤氏を講師にお招きし、トイレの利用マナーに関する講習や、いつまでも大切に美しく使うためのメンテナンス（清掃方法）の体験教室を実施しました。

学校のトイレに対する考え方は、どんどん進化しています。ただ排泄できればよいという場所ではなく、生徒一人ひとりが、ほっと安心し、癒され、守られ、心と身を健やかに育める場であってほしいと願っています。

楽しく、おいしく! お芋パーティー

11月1日(木)のお芋掘り、そして7日(水)の収穫感謝礼拝に続いて8日(木)には、朝からかまどで薪を燃やして豚汁作りの準備が始まりました。子どもたちが掘ったお芋を使っての「お芋パーティー」です。

別の場所では、焚き火コーナーを作ってアルミホイルを巻いたお芋を並べ、おやつ焼き芋作りをしました。

この日、おいしく食べるために、みんなで力を合わせて忙しく働きました。



かまどには、最近あまり見ない「はそり」という大きな鍋をかけます。この中に子どもたちが、野菜やお芋などを小さく切り、豚肉も入れてグツグツと煮ます。

お昼までには“お手伝い母さん”14名のおかげで、おいしくでき上がりました。みんなで一緒に温かい豚汁をいただくと、心も身体もほかほかになり、感謝の気持ちでいっぱいになりました。どうも、ごちそうさまでした!

父母の会バザー2007

10月27日(土)、父母の会バザーが大盛況の中で開催されました。

当日までの多くの計画と、その準備において、父母の会みなさんが示されたパワーに圧倒され、またその深い愛情には感動いたしました。

また今年も、黄色の腕章をつけた卒園生(小学校高学年~中学生)が、バザー当日のお手伝いをしてくださいました。

このように、主体性を持ち、他者のために行動できる子どもたちの育ちを見ることができて本当にうれしく、すばらしい思い出になりました。



イベント盛りだくさん!
当日の悪天候を吹き飛ばすほどの盛り上がりでした

「障害者と市民のつどい」ファッションショー開催



鮮やかで美しいファッションに身を包んだモデルのみなさん。まさに「晴れの舞台」となりました

10月21日(日)、「障害者と市民のつどい」(久屋大通公園)で、生活環境学部環境デザイン学科の教員と学生が中心となってコーディネートした、障害者のためのファッションショーが開催されました。

テーマは「結婚式の装い」。面倒で着づらいイメージのある礼服を着脱が簡単にできるようにしたほか、車椅子でも美しく見える“ユニバーサルデザイン”のウェディングドレスを製作・披露し、来場された多くの方々の注目を集めました。

生活環境学部の平林由果教授、人間生活学研究科で博士を取得した非常勤講師の平岩暁子先生を中心に、環境デザイン学科の竹田慶子さん、岡本緑さん、他2名の4年生、さらに卒業生で非常勤講師の丸山真澄先生もカラーコーディネート等の担当として加わり、ウェディングドレスほか、列席



者用のドレス、スーツ、計5着を製作・リフォーム。一方、モデルには、日本リウマチ友の会とわっぱの会から、5名にご参加いただき、製作段階からご協力いただきました。

学生にとっては、障害者の方とのコミュニケーションをはじめ、「窮屈でなく、簡単に着られるようデザインするのに苦心した」「なかなかぴたり合わなかった」と異口同音に語るとおり、困難の連続だったようです。ウェディングドレスを担当した平岩先生も「製作期間2か月の間で、やり直した回数は数えきれない」と振り返ります。

ショーの後、モデルのみなさんは「きれいなドレスを作っていただけで、本当にありがたい」と、いずれも喜びに満ちた感想を残されましたが、製作した先生や学生たちも「試着のたびにモデルのみなさんの顔が生き生きとしていくのを見て、こちらもうれしくなった」「とてもきれいだった」と、感無量の様子。来場された方々からも大きな拍手をいただき、



ファッションショーは大成功に終わりました。

なお、今後は「金城学院大学・ファッション工房」として「年齢・障害・体型等に関係なく、誰もがファッションを楽しめるよう手助けする」というコンセプトの下、依頼者の希望に合わせて衣服のリフォーム・オーダーメイド等、活動を広げていきたいとのこと。現在、活動に参加してくれる学生・卒業生を広く募集しています。

入賞句発表！

キャンパス川柳

図書館の主催により、大学・大学生活に関係するテーマで募集されていた「キャンパス川柳」の入賞句が決定し、去る9月25日、表彰式が開催されました。

応募総数202句の中から、学長賞1句・図書館長賞1句・優秀賞6句・特別賞1句が選ばれ、受賞者には、学長から賞状と記念品が贈られたほか、入賞句はしおりにして図書館で配布されました。

各賞の入賞句は、以下のとおりです。

- 〈学長賞〉スローガン 『強く』ばかりが育ちすぎ
- 〈図書館長賞〉先生たち 尊敬できる変わり者
- 〈優秀賞〉触れた時 時代感じる書庫の本
美と才は 絶やさぬ努力で叶うもの
学生は 『強く、優しく。』たくましく
寝坊して 開き直って自主休講
E評価 エクセレントと思いたい
就活は ファッション メーカーも小休止
- 〈特別賞〉先生と 呼ばれる私も1年生



柏木学長、柴田図書館長と入賞者のみなさん

- (文学部 日本語日本文化学科1年)
- (文学部 日本語日本文化学科4年)
- (文学部 言語文化学科3年)
- (生活環境学部 生活環境情報学科1年)
- (生活環境学部 生活環境情報学科3年)
- (生活環境学部 食環境栄養学科4年)
- (現代文化学部 国際社会学科4年)
- (大学院文学研究科 社会学専攻1年)
- (薬学部 薬学科教員)